

編集後記

編集後記の依頼が来てから生来の筆無精もあり、原稿を書く事を伸ばしに伸ばしてきた。この間、北京オリンピックがあり、陸上短距離男子リレーでの銅メダルや女子ソフト悲願の金メダル獲得、また北島康介の二種目二連覇などに世間が浮かれていたが、我々医療人にとって忘れてはならないのが福島県立大野病院事件に無罪判決が出たことであろう。

一般にある疾病に関して治療の大まかな道筋が決まっていたとしても、必ずしも治療の過程において同じ道筋を通らないことは我々のよく経験することである。治療方針に関して医師がそれぞれでの意見を持つ事も世間が考えるほど珍しいことではない。それ故、一つの見解があたかもそのみが真実であるように主張され、それによって逮捕されるような環境であってはたまった物ではない。恐ろしい世の中になったものである。

大野事件ほど世間の注目を集めてはいないが、院内感染に関する研究報告を学会で行ったところ、それを嗅ぎ付けたマスコミの追求により病棟閉鎖に追い込まれた大学病院の事例を知っている。東大の研究グループの調査によれば近年明らかに副作用や合併症などネガティブデータの論文は急激に減少しているとのことである。医療はこれまで『失敗』の歴史の中からその成長をとげてきた一面があるが、こんな状況では行く末が危ぶまれる。的確な警告が出てこないとするによって損害を受ける患者が必ずやでてくるであろう。副作用のまっ

たくない薬や、合併症のない治療法などこの世に存在しないのだから。

これは形を替えた検閲のようなものであり、医学の正しい発展を阻むものである。大野病院における医師逮捕によりいわゆる『萎縮医療』が進んだ事はまごうことなき事実であり、論文、学会発表に対するマスコミの行き過ぎた批判報道は医学そのものを萎縮させる危険性がある。もちろんパーフェクトな医療行為を行うことが我々の究極の目的ではあるが、どのような医療であれいまだ発展途上にあるという冷徹な事実も認識しなければならない。一人の医師が生涯に経験できる医療行為の数などたかがしれており、それを補ってくれるのが論文や学会発表なのである。予防可能な合併症の知識を共有せず多数の患者を排出していく愚だけは避けたいものである。

題材がいささか悲観的な内容となっていることについてはお許しをいただきたい。しかし、これが現実には我々の周りを取り巻いている環境なのである。何年か後にまたプラスの部分もマイナスの部分も何の気兼ねも無く論文として報告できる時代が来ることを切に願うものである。最後となったが、この駄文におつきあいいただいた諸兄に感謝するとともにこのような厳しい環境の中で貴重な論文を投稿して下さった先生達には心から敬意を表したいと思う。

(森下清文)